

王であるキリスト

第一朗読 エゼキエル 34・11-12, 15-17

第二朗読 一コリント 15・20-26、28

福音朗読 マタイ 25・31-46

2023.11.26 9:30 ミサ

カトリック高円寺教会

主任司祭 高木健次神父

今日の福音でイエス様がおっしゃったこのたとえ話を要約すれば、この世においてどのように人は過ごすか、他者に対してどのように振る舞うかによって永遠の運命が決まります、一人ひとりがどのように生きたかによって、備えられた天の国を受け継ぐのか、あるいは永遠の罰を受けるのかが決まります、というのが今日の福音の、かいつまんでいえばそういうようなメッセージを受け取ることができますけれども、キリスト教が言いたいことがこれであったならば、福音書はここで終わって良いわけなんです。

しかし、マタイの福音書をずうっと順番に読んでいけば、この後からが最も大切な部分が始まるということになります。このたとえ話のあとから福音書が語るのは、イエス様の受難——つまり弟子たちから見捨てられて十字架につけられて死ぬ、そして復活を語ります。ですから、その福音の順序から素直に読んでいけば、この世の生き方によってわたしたちは裁かれて永遠の運命が決まるということが最終的に福音書が言いたいことではない、と言わざるをえないわけです。

むしろ、このあとから続く、イエス様がどうして十字架につけられねばならなかったか、それをお引き受けになったかということが福音書のテーマです。それはこの左側に分類された、本来であるならば永遠の罰を受ける、そういう者たちをご自分の国に迎え入れるための受難でしたということです。わたしたちは誰でも、この世において完全に神様のみこころを果たすことができる者はいない。神の憐れみによって救われるのだ。それをイエス様ご自身が受難ということを通して示してくださったということを通して福音書を読み進めるうちに、読者は気づいていくわけです。

ですから、わたしたちはそういう意味で、自分が「まあ時々ボランティアとかしてるから右のほうだろう」みたいな、あるいは「左かな？」みたいな、そういうようなことを考えることそのものが、ある意味では、極端に言えば無意味なんです。

じゃあイエス様ご自分の命を通して、受難を通してわたしたちに救いへの道を開いてくださったから、わたしたちは今まで通りなんにもしなくて良い、ということに

はならない、というか、しなければならぬか、しなくて良いか、と言うことであれば、しなくて良い。しかしほんとにイエス様に出会うならば、したくなる。イエス様と共に、イエス様のようになりたくなる。それが救いの実現していく様なんだと言うことではないかと思います。

神様は決してわたしたちが恐怖にかられて、また義務感からなにかご自分のみこころに従わざるをえない、そういうようなことを望んでいるわけではない。そういう意味では、今日、「王であるキリスト」という名前で祭日をお祝いしていますけれども、そこに籠められている「王」という単語につまづいてはならないわけです。この世の王様は恐怖とか罰則とかを通して他の人々を自分の意に従うように強制するというイメージがある。しかし、王であるキリストはそうではない。自分自身のすべてをわたしたちのために渡してくださることを通して、わたしたちがそのご自分の影響を受け取る——自由に、それを待っていらっしゃるというかたなんだ、それを記念しているわけなんです。

今日の第一朗読はエゼキエルの預言ってというのが朗読されましたけど、このエゼキエルは、神様ご自身がご自分の民を導くっていう、その約束を語っていましたが、その導き方はどういうものかというのを別の箇所で告げています。それは、神様が一人ひとりの心を、「石の心を取り除いて、肉の心を与える」(エゼキエル 11・19) っていう、そういう言い方をしています。「肉の心」つまり柔らかい心、人々の痛みに共感し、また神様のみことばから影響を受ける——石は何の影響も受けない——、でも影響を受ける。そして神様のみことばを受け取っていくことができるようになる。そういうようなイメージです。

わたしたちが王であるキリスト——でもその王はご自分のすべてをお与えになる、山羊を救うために、という、そのみこころに触れていくときに、わたしたち自身も少しずつ変えられていく。変えられなければならないんじゃないじゃなくて、イエス様に出会っていくうちに自然に影響を受けるんじゃないのかなって、そこに希望がある。そういうことなのではないかと思います。

ですから、わたしたちは絶えずイエス様のお姿を見つめながら、でも同じように自分の中にそういう心を、「石の心ではなく、肉の心」、柔らかい心はもう神様から与えられているんだと信じて、そこに出会っていかうとする、その思いあ大切なのではないかなあと思います。

今日、もう一つ、「世界青年の日」、若者たちのために教皇様がメッセージを出されるわけなんですけども、今年のテーマは「希望をもって喜びなさい」っていうもので

した。社会を見れば、色々希望を失うようなことがある。でもその中で希望をもつということは、なにか希望をもてるようなことがあるから自然に希望をもって喜べるという、そういう受け身的なものではないということです。そうではなくて、希望が一見するとないように思える中で、希望をもつてもう一回物事を見つめ直してみると、そういう人生の選択の問題——希望をもたないか、もつかという選びの問題、一人ひとりの決断の問題である、ということなんです。そうしてイエスを見つめながら自分の中にも神様の似姿である良いものがある、そうしてそれが他の人から影響を受け、また影響を与えながら、この世の中をより良いものに変えて行く、その種が既にある、そういう思いでもう一回現実を見つめ直す、そういう希望であるわけです。

若者たちだけではなくて、わたしたちが若者たちと共に教皇様の声に、呼び掛けに耳を傾けながら、わたしたちが相応しくない者でありながら、でも絶えず待っていらっしゃるイエスの思いに出会っていく、その希望を新たにしたいと思います。そうしてわたしたち自身がイエスと共に、またイエスに支えられて、この世にあって希望の種となっていくことができますように、互いのために恵みを願い合いながら、このごミサをお捧げしたいと思います。

参照：2023年第38回「世界青年の日」教皇メッセージ（2023.11.26）

<https://www.cbcj.catholic.jp/2023/11/22/28277/>

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>